

『神の言葉はとこしえに』(イザ 40:1~11)

イザヤ書 40~55 章の著者第二イザヤは、バビロン捕囚は神さまの言葉を語る預言者を退け、神さまを背く罪を重ねる人たちへの神さまの審判の出来事である、と理解しました。

1~2 節で、第二イザヤは、人々は神さまによって定められた期間苦役を受けたが、今やその期間が満ちて罪が許され、二倍の報酬を受けると、捕囚の人々に慰めの言葉を語りました。そして、彼は、「バビロンと祖国の間にある荒れ地に神さまの通る広い道を通せ」という天のみ使いたちの声があると語りました。また、4 節の直訳は「山と谷は低くなる。険しい道は平らに、狭い道は広い谷となる」です。つまり天のみ使たちが神さまのための道を砂漠に通す時、自ずとその辺りの自然は変貌して、神さまとイスラエルの祖国帰還を容易にする。そしてその奇跡を人々は神さまの栄光の現れとして目の当たりにするというのです。もちろんこういう慰めは人々に通用しませんでした。

彼に「呼びかけよ」という神さまの声が届きましたが、彼は「何と呼びかけたらよいのか」(6 節)と神さまに問い返しています。野の草のように無力な人間でしかない者が、無力な人間に向かって何を語れというのだろうか。神さまの裁きの現実を生きている者の嘆きを知っているだけに、彼には大きなためらいがあったのです。イスラエルでは、夏に砂漠を越えて来る熱風が吹くと、一晩で緑の草と赤い花が茶色の枯れた草や花になってしまいます。それがイスラエルの人々の見ていた現実でした。彼は、「主の風が吹きつけたのだ。この民は草に等しい。」(7 節)と語りますが、8 節で草は枯れ、花はしぼむが、神さまの言葉はいつまでも変わることがないという確固たる信頼を語るのです。聖書の中で人間が草花のはかなさに喩えられている箇所は数多くありますが、ここではそのはかなさと対比して決して変わらない神さまの言葉への信頼が意識されているように思われます。神さまはあなたたちをじっと見ておられる。神さまはいつもあなたたちを愛している。神さまの言葉は永遠に変わることなく、あなたたちのすぐそばにある。ここで、私たちが心に留めなければならないのは、人間のはかなさではなく、神さまの言葉の確かさなのです。

最後の 11 節では、「神さまは、羊飼いとて、私たちの全存在を抱き留め、受け入れてくださり、羊飼いが小羊を安心させてその母のところに導くように、私たちの新しい人生を導いてくださる」と語っています。神さまはその太い腕でしっかりと私たちを抱きとめてくださるというのです。この変わることのない神さまの言葉を信頼し、委ねて、新しい命に立つようにと、神さまは私たちを招いておられるのです。